歌碑　文化　寺社　石橋　板碑　神体　伝統　歴史

南阿蘇っていいな

点在する文化財を訪ねて

（随時掲載）

暑い日が続いていますね。家族内で「暑い」と言ったら100円の罰金を払い、それでアイスクリームを買おうと取り決めをした途端、午前中だけで600円も払う羽目になりました。

暑さにも臨時出費にもめげず、今回も出かけてまいりました。

場所は久石地区の「片山寺」ですが、ここがまた眺望素晴らしく、阿蘇の山々を手に取るかのようなところに位置しています。

やはり山を見るときは順光で見るのが最も良くて、さらには陽が少し傾き始めて縦に入った稜線に影が浮かび上がるころは、何とも言えない神々しさを感じることができます。

そんな片山寺に行く前に、もう一度だけお勉強しましょうかね。

今回の勉強は仏像安置の核心に迫るもので、これを覚えていただければもうみなさんも仏像鑑賞のエキスパートになれますので、がんばってくださいね。

まず仏像は如来、菩薩、明王、天の4つの部に分かれていますね。

その中の一番位が高いとされる如来の中の釈迦如来、そのほか薬師如来、阿弥陀如来などの仏像を1体安置するとすれば、二番目に位が高い菩薩の部から本尊を守護するために脇侍となって、各如来別にいろいろな菩薩が一緒に安置されるのです。

たとえば、釈迦如来でしたら文殊菩薩と普賢菩薩が脇侍となり、阿弥陀如来には勢至菩薩と観音菩薩が、薬師如来には日光菩薩と月光菩薩が脇侍として安置されています。

同様に菩薩の部から私たちに一番身近な観音菩薩を安置する場合は、その下の位から不動明王が、さらにその下の位から毘沙門天が守護する形となります。

こうした序列が顕著に表れているのが薬師如来です。

先ほどの日光菩薩、月光菩薩が2方向を守っているその下に4方向を守る四天王（持国天、増長天、広目天、多聞天）がいて、さらにその下には12方向を守るために十二神将が配されます。

四天王は一人一人が守る方向や役目も決まっており、今後機会があれば説明したいと思いますが、何しろ仏像は奥が深いものですから今回のシリーズではここまでとします。

さて、話を少し戻しますが、菩薩のお顔はやさしくて癒し系でしたね。

ところが明王の部、天の部になりますとその形相は一変し、怒りとともにこちらを睨みつけるそのお顔は恐ろしさこの上ないですね。

しかし、なぜあんなお顔をされているか理由がわかれば、決して怒っているのではなく、また恐ろしいものでも何でもありません。

といいますのは、明王と名がついていれば大日如来の化身と言われており、なまやさしいやり方では人々を救済できないことから、如来の意を受けて悪の道に行こうとする者をさえぎり、人生上のいろいろな誘惑や困難を打ち砕いてくれる大きな力を持った特使ということになります。

また、あの恐ろしい形相は人びとを必死に救おうとするためで、たとえば小さいこどもが三輪車で踏切にでも入ろうとしようものなら、親は叱りながら必死になってとめますが、その時の顔はこどもから見ればとても恐ろしく見えますね。

さらに、恐ろしい目は悪魔を睨みつけているとよく言われますが、そうではなく明王は悪魔など問題にしていないといいます。それは燃えさかる炎の中でこどもが泣き叫んでいれば親は無我夢中で助けに行きますが、その時火という魔物を睨んでいるひまなどあるはずがありませんね。

ということで、あの恐ろしい形相は私たちを必死で守っている慈悲深いお顔ということをご理解いただければ、これから先の仏像拝顔時はこれまでと違った目で見られますよ。

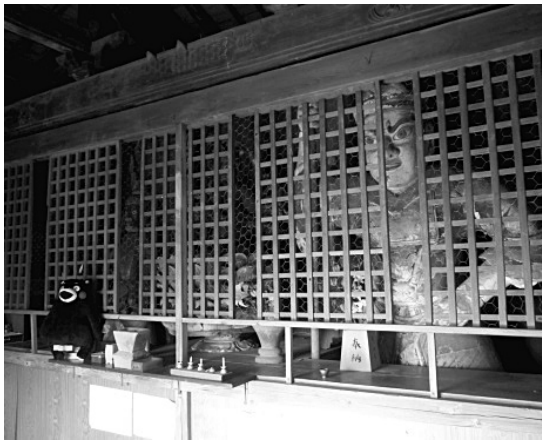
仏像の位置関係と位関係が、ことさら大きく表現されているのが片山寺です。

拝殿に上がった途端、その迫力に圧倒されます。

中央の千手観音の左には赤い炎を光背にした不動明王が立ち、右側には本尊よりはるかに大きい毘沙門天が上半身だけで立っておられ、その光景に息を呑むほどです。

不動明王も毘沙門天も、そのすさまじい勇姿を必見する価値が十分にあります。

素晴らしい仏像が点在する、この南阿蘇っていいな。



毘沙門天のこのお顔には訳が……（くまモンの高さは約50センチです）

〔記事と写真〕
県文化財保護指導委員
笠野　次雄